

写真 2—13 大久保掘生遺跡の住居跡群（勝山町教育委員会蔵）

のが多い。住居の入口は一部で北東側のものがあるが、大部分は南東側に向いている。住居内から多量の炭化材が出土した焼失家屋と考えられる住居跡が二軒確認されている。

これら弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡からは壺・甕・鉢・高杯・器台・ミニチュア土器などの土器類や石庖丁が出土している。

甕棺墓は調査区東部の19号住居の北側に隣接した場所で発見された。墓壙は長さ〇・七五メートル・幅〇・四五メートルの楕円形の平面形を呈し、床面はほぼ水平である。下側に甕、上側に壺を使用した合わせ口の甕棺で、全長〇・五五メートルの小児用である。下甕の内面からわずかに赤色顔料が検出されている。この甕棺墓は弥生時代終末から古墳時代初頭の時期のものと考えられる。

三 小長川遺跡

小長川遺跡は勝山町のやや北部で、長峽川支流の池田川西岸の低丘陵上に位置する。この低丘陵は長川集落の北方約四〇〇メートルで、北側の加廊戸池と南側の長迫池に挟まれて北西から南東方向にのびている。遺跡は丘陵の先端部の標高四五〜五三メートル付近に立地する。当遺跡の所在地は大字長川字小長川である。

当遺跡は福岡県の遺跡分布図では加廊戸池東遺跡として登録されている遺跡で、弥生時代の甕棺墓群の存在が確認されているものである。また、丘陵北側の崖下面は長川北遺跡の名称で

遺物包蔵地としても知られており、弥生土器片の他に石庖丁や石斧が採集されている。更に、南側に隣接する丘陵上には弥生時代中期の遺物包蔵地である長川西遺跡が所在する。

調査の契機は当遺跡が立地する丘陵での工場建設に伴うものである。平成三年秋に事業主体から埋蔵文化財の有無の照会があり、これを受けて福岡県教育庁京築教育事務所の指導のもとに町教育委員会が試掘調査を行った結果、丘陵先端部で遺構の存在を確認し弥生土器片を採集した。しかし、開発の対象となった丘陵の大半はかつて重機による削平を受けており、特に丘陵奥の部分では、試掘時にも遺構の存在が確認できなかった。

発掘調査は平成三・四年度に実施し、試掘調査時に遺構の存在が確認された丘陵先端部の稜線上の平坦面を対象とした。調査面積は一四五〇平方メートルである。

発掘調査で確認された主な遺構は、集落関係のものでは竪穴住居跡一軒・貯蔵穴二五基があり、墓地関係では方形周溝墓に伴う石棺墓五基の他に、石蓋土壙墓三基と石室二基・石敷遺構一基がある（写真2―14）。ただし、このうち石室と石敷遺構は古墳時代に築造されたものと考えられる。

集落の調査

集落関係の遺構である竪穴住居跡と貯蔵穴は弥生時代中期の時期に営まれたものである。

竪穴住居跡は、調査区北部の稜線上平坦面の南側斜面際に立



写真2―14 小長川遺跡全景（勝山町教育委員会所蔵）

地する。住居跡の南側約三分の一は斜面で流出し消滅している。残存する住居跡の床面は直径六・七メートルのほぼ円形の平面形をなし、周囲の壁際には幅三〇センチ・深さ七センチ前後の排水溝がめぐらされている。住居跡の壁面は最も残りのよい部分で高さ七〇センチをはかる。床面の中央付近には長径約一〇〇センチ・短径五五センチの長楕円形で、深さ三〇センチの掘り込みがあり、炉跡と考えられる。住居跡の屋根を支える主柱穴は壁際の排水溝の内側一メートル前後にはほぼ円形に配置されており、五本が確認されたが、本来は六〜七本で構成されていたものと推定される。出土遺物は弥生土器の甕と、研磨面のある用途不明の石器とがある。

貯蔵穴は調査区の中央部から南部に集中して分布し、丘陵の西側斜面に展開する。調査では二五基が確認されたが、調査区外の東側や西側にも広がっているものと予想される。調査された貯蔵穴の断面形は地表面の入口部分が狭く床面が広いいわゆる袋状をなすものが大部分であるが、地表面と床面の幅がほぼ同じ井戸状をなすものもある。深さは浅いもので〇・五五メートル、深いものでは二・七八メートルをはかる。床面の平面形は円形を基本とし、楕円形をなすものも見られる。直径は最小のもので〇・八七メートル、最大のものでは二・二八メートルである。床面の中央部付近に梯子を固定するための小穴を掘り込むものが四基ある。一号貯蔵穴は調査区の南端部に位置し、断面形が袋状を呈するものである。一四号貯蔵穴は貯蔵穴群の中央部付近に位置し、断面

形が井戸状で、床面は円形の平面形で中央部に小穴を有するものである。

墓地の調査

墓地関係の遺構である方形周溝墓に伴う石棺墓及び石蓋土壙墓群は、副葬品等の遺物の出土量が少ないためすべての遺構の時期を特定できないが、おおむね弥生時代後期に築造されたものと考えられる。墓地の構成は方形周溝とそれに囲まれた五基の石棺墓が調査区の北端に位置し、方形周溝墓の南東側に三基の石蓋土壙墓が配置されている(写真2-15)。

方形周溝墓の溝はほぼ直角に屈折する北辺と東辺の一部が検出されただけで、西側が調査区外となっており、南側も斜面下位のために流出していることから、全体の規模は不明である。ただし、北辺の西端部で墓地内に入るための周溝が途切れた陸橋部が確認されており、この陸橋部が北



写真2-15 小長川遺跡の方形周溝墓
(勝山町教育委員会所蔵)

辺の中央部に設置されていたと仮定すると北辺の規模は二二[㍉]前後になる。

方形周溝墓内の埋葬施設は五基の石棺墓しか確認されていないが、調査区外にも分布していた可能性がある。1号主体部は北東隅近くに位置する二段掘りの石棺墓で、五基中最大の規模を有する。墓壙は平面形が長さ二・八三[㍉]、幅二・三五[㍉]の長方形で、深さは〇・三〇[㍉]である。石棺は墓壙の主軸に対して斜行する方位を取る。棺の蓋石には緑泥片岩の板石を五枚使用し、それぞれの石の隙間には粘土の目張りが施されている。石棺の側壁の石も緑泥片岩の板石で、西壁で四枚、東壁で五枚が立てられている。棺内の大きさは長さ一・七七[㍉]、幅〇・四四[㍉]・深さ〇・四〇[㍉]である。頭位方向は東側で、床面が高さ八[㍉]ほど枕状に高く作られている。棺内からは全面で赤色顔料が検出され、特に床面の赤色顔料は厚さ二〜三[㍉]をはかる。棺内の枕状の部分には頭骨が遺存しており、銅鏡がその南側に接して鏡面を上にして置かれていた。また、頭骨をはさんで銅鏡と反対側の壁際には素環頭刀子が切先を東側に向けて副葬されていた。銅鏡(図2-54・8)は斜縁鳥文鏡で、一部欠損しているが、直径一〇・二[㍉]である。中央の紐を取り巻く内区には四つの乳があり、その乳の間に鳥文が配置されている。その外側の銘帯には「自」の文字が確認できるが、他の文字は不明である。この鏡は中国の後漢後半ごろに製作された舶載鏡である。

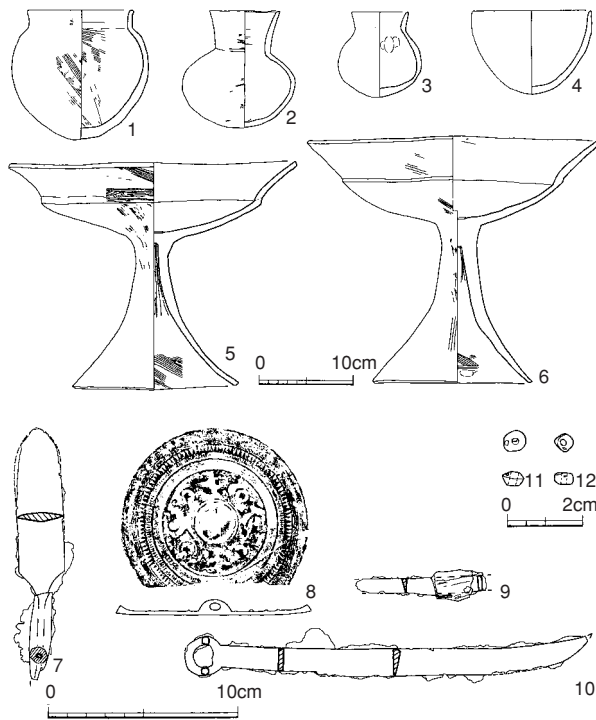


図2-54 小長川遺跡方形周溝墓出土遺物

素環頭刀子(同・10)は全長二一・一[㍉]、刃部長一四・一[㍉]、刃部幅一・四[㍉]である。環頭部は直径二・〇[㍉]のほぼ円形で、先端の切先部は上方に反っている。

2号主体部は1号主体部の南西に隣接する石棺墓である。墓壙は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ二・四一[㍉]、幅一・三八[㍉]である。棺の蓋石は花崗岩が一枚あるが他の五枚はすべて緑泥片岩であり、各蓋石間の隙間の粘土目張りは確認されていない。左右の壁面にはおのおの六枚の板石を立てて使用してい

る。棺内の大きさは全長一・六八^分、幅〇・三七^分、深さ〇・三八^分である。頭位方向は床面に粘土枕が作られていた北側で、主軸の方向はN15°Eである。棺内の床面と壁面からは赤色顔料が検出された。また、棺内埋土から刀子(同・9)が出土したが、床面から遊離しており、副葬品ではない可能性もある。

3号主体部は1号主体部の墓壙南側の一部を切って築造された石棺墓である。墓壙は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ二・一六^分、幅一・二二^分である。棺の蓋の側壁に使用した石材はすべて緑泥片岩である。蓋石下の側壁上面の周囲には小石や粘土で高さの調整と目張りがなされている。棺内の大きさは長さ一・五六^分、幅〇・四三^分、高さ〇・三二^分である。棺内床面の北側に厚さ二^分ほどの粘土枕があり、こちらが頭位方向と考えられ、主軸の方位はN11°Wである。棺内の床面と壁面からは2号主体部と同様に赤色顔料が検出された。副葬品は出土していない。

4号石棺墓は3号主体部の南側二^分に位置する。棺内の大きさは長さ一・〇二^分、幅〇・三六^分、深さ〇・二五^分と小形の石棺墓である。蓋や側壁の石材には花崗岩を使用している。頭位方向は棺の幅が広くなっている北西側と考えられる。棺内外から粘土や赤色顔料は検出されていないが、埋土中からはガラス小玉(同・11、12)が二点出土している。このガラス小玉は

コバルトブルーの色調を呈し、大きさは直径〇・四^分〜〇・六^分のものである。

5号石棺墓は4号石棺墓の東側一^分に位置する。棺内の大きさは長さ一・二二^分、幅〇・三九^分、深さ〇・二二^分とやや小形の石棺墓である。石材は花崗岩と緑泥片岩両方が使用されている。頭位方向は棺の幅が広くなっている北側と考えられる。

粘土目張りはないが、床面の一部で赤色顔料が検出された。東側壁直下で、頭位の小口から約三〇^分南側の床面上で鉄鏃(同・7)が出土した。鉄鏃は全長一二・八^分、鏃身部長八・六^分、幅二・四^分の有茎鏃で、茎部には矢柄の木質が遺存している。

周溝は北辺で長さ一〇・五^分が検出され、最大幅一・三^分、深さ〇・四六^分をはかる。東辺は長さ七・六^分が残存し、最大幅一・一^分、深さ〇・三^分である。溝の断面は逆台形を呈する。北辺の溝内から祭祀に使用した高杯(同・5、6)四点・壺(同・1、3)四点・鉢(同・4)一点の土器が出土している。

方形周溝墓が築造された時期は周溝内から出土した土器からみて、後期の終末と考えられる。また、銅鏡や鉄器・玉類の副葬品が出土したことから、そこに埋葬された人々は長川周辺に所在した集落の首長層と推測される。